11『ノーサイド・ゲーム』

——実業団ラグビーチームのゼネラルマネージャーとなった君嶋は、スタッフの多英と共に、新監督に迎えたいと願う柴門との交渉にのぞむ。……

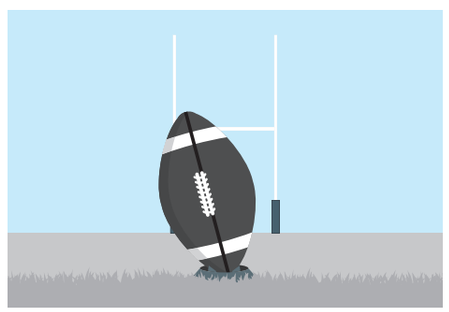
「社内でラグビー部はどう見られてる？」質問も的確だ。「正直、予算案を通すのはひと苦労だ。」（ A ）から出任せをいっても仕方がないので、正直に君嶋は打ち明けた。「コストの塊だと酷評する役員も何人かいる。社長のラグビー愛に支えられている部分は大きい。」「いつ、廃部になるかわからない状況か。」隣にいる多英が椅子の上で身じろぎするのがわかった。柴門の鋭い眼差しが、じっと君嶋を見据えてくる。

「そこまで切迫してはいないが、成績が低迷すれば可能性はある。」柴門はなんとこたえるだろうか。企業スポーツにとって、廃部は最大のリスクだ。少しでも、その可能性の低いチームを率いたいと思うのは当然だろう。

「強化方針を撤回するとか、そういう具体的な話は出たか。」「そこまではない。①すったもんだはあったが、予算案も満額通った。」そうか、と柴門はほっと息を吐いた。強化方針が撤回されれば、企業チームはあっという間に弱体化するからだ。「そちらが希望する契約の条件は。」［ I ］直入に、柴門はきいた。「プロ契約で頼みたい。」と君嶋。「何年契約にするかは相談させてくれ。」「正直、それはどこまでのことを期待しているかによる。」逆に問われ、「優勝争いができるチームにしてほしい。」そうはっきりと君嶋はこたえた。

「そして、できれば優勝したい。」じっと、柴門の（ B ）が君嶋を見据えている。

やがて、「いつまでに。」そんな問いが発せられた。「できれば、三年以内に。」考える間が入る。柴門の前には、資料として渡した選手とスタッフのリストがあった。一旦②そこに視線を落とし、何かを考え、やがて（ C ）が上がって視線が君嶋に戻ってくる。その瞳に向かって、君嶋は頼み込んだ。「引き受けてくれないか。ウチには柴門、お前の力が必要なんだ。この通りだ。——頼む。」③息を詰めた多英が、柴門のこたえを待っている。さらに思案した柴門が口にしたのは、「三年は長すぎるな。」というひと言だ。「二年契約にしてくれ。二年で優勝争いができるチームにする。だが、優勝までは約束できない。優勝を争うチームと、本当に優勝するチームにはかなりの差がある。④そこまでできるかどうかはわからない。」「わかった。他に条件は。」「地域密着型のチーム運営をしたいという意思は尊重するし、それに選手を駆り出すのはかまわん。だが、練習方法とかに口出しは一切せず、まかせてほしい。もし口出ししたら、その時点でオレは降りる。」「わかった。」



作者紹介

池井戸 潤（いけいど じゅん）

一九六三（昭38）年～。岐阜県生まれ。小説家。一九九八年、『果つる底なき』で江戸川乱歩賞を受賞。『鉄の骨』で吉川英治文学新人賞、『下町ロケット』で直木賞を受賞。ほかに「半沢直樹」シリーズや、『空飛ぶタイヤ』『陸王』『アキラとあきら』などがある。

問1 （ ）A～Cに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。

ア 目　イ 耳　ウ 口　エ 顔

A＝（　　）　B＝（　　）　C＝（　　）

問2 ——線部①の意味として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア ののしり合い　イ ごたごたしたもめごと

ウ だまし合い　エ 暴力沙汰

問3 ［ ］Iに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 端刀　イ 単刀　ウ 担刀　エ 胆刀

問4 ——線部②・④の「そこ」が指す事柄を文中からそれぞれ抜き出して答えよ。

②＝

④＝

問5 ——線部③はどんな気持ちからの行動か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 緊張して　イ 期待して

ウ 恐れて　エ 予定を考えながら

問6 君嶋と柴門が了解し合った「契約」の要点を、四〇字以内で具体的に述べよ。